

高齢男性に発症した尿道内尖圭コンジローマの1例

田中 絢子^{1,3}, 権藤 立男^{1,3}, 橋本 剛¹, 鹿島 剛¹
山本 秀伸¹, 田中 道雄², 大野 芳正³, 橘 政昭³

¹東京都立広尾病院泌尿器科, ²東京都立広尾病院病理診断部

³東京医科大学泌尿器科学講座

URETHRAL CONDYLOMA ACUMINATA IN AN ELDERLY PATIENT : A CASE REPORT

Ayako TANAKA^{1,3}, Tatsuo GONDO^{1,3}, Takeshi HASHIMOTO¹, Takeshi KASHIMA¹,
Hidenobu YAMAMOTO¹, Michio TANAKA², Yoshio OHNO³ and Masaaki TACHIBANA³

¹The Department of Urology, Tokyo Metropolitan Hiroo Hospital

²The Department of Pathology, Tokyo Metropolitan Hiroo Hospital

³The Department of Urology, Tokyo Medical University

A 76-year-old man presented to our hospital with asymptomatic bleeding of the urethra. Endoscopic examination showed multiple urethral papillary tumors in the pendulous urethra, and the tumors were surgically resected. Histopathological examination indicated urethral condyloma acuminata, and the results of a polymerase chain reaction-based invader assay using urethral swabs taken after surgery suggested low-risk human papilloma virus infection. This is a relatively rare case because urethral condyloma acuminata has been reported in only a few elderly patients so far. No obvious recurrence of condyloma acuminata has been observed for 18 months after surgery.

(Hinyokika Kiyo 59 : 133-135, 2013)

Key words : Urethral condyloma acuminata, Elderly patient

緒 言

尖圭コンジローマ (condyloma acuminata) は human papilloma virus (HPV) 感染症の1つで, 青壮年期の性活動の盛んな年齢層における性感染症として発症することが多い。好発部位は外陰部であり, 尿道のみに限局したものは比較的稀である。今回われわれは高齢男性の前部尿道に発生した尿道内尖圭コンジローマの1例を経験したので報告する。

症 例

患者 : 76歳, 男性

主訴 : 下着への血液付着

既往歴 : 4年前に左大腿骨頸部骨折にて左大腿骨人工骨頭置換術を施行。

現病歴 : 下着への血液付着に気づき, 当科を受診した。

初診時現症 : 身長 150 cm, 体重 50 kg, 体温 36.0°C, 血圧 132/81 mmHg。腹部触診にて腹部平坦, 弾性軟, 圧痛なく, 鼠径部にリンパ節腫脹は認めなかった。陰茎, 亀頭部, 外尿道口, 陰囊, 肛門周囲に異常を認めなかった。

血液・尿検査所見 : 血液一般, 血液生化学検査に異常を認めず, また梅毒・肝炎ウイルス・HIV などの

感染症も陰性であった。尿沈渣は 赤血球 ≥ 100 /HPF, 白血球 1~4/HPF, 尿細胞診は class III であった。

腹骨盤部 CT : 血尿の原因を示唆する異常所見は認めなかった。

尿道膀胱鏡 (Fig. 1) : 外尿道口より 3~6 cm 近位の振子部尿道に乳頭状腫瘤を複数認めた。後部尿道, 膀胱内に異常所見を認めなかった。

骨盤部 MRI : 腫瘍の尿道壁外浸潤を疑う所見は認

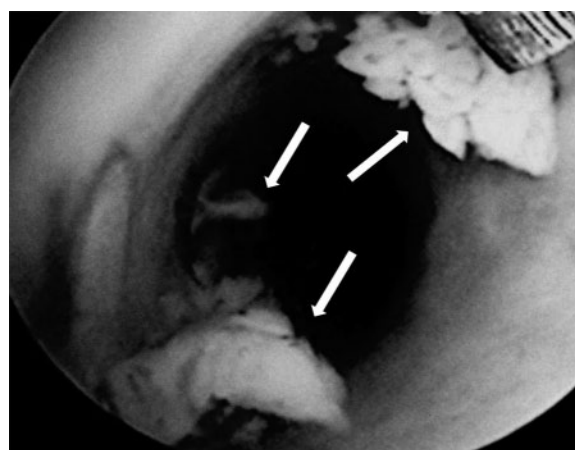


Fig. 1. Endoscopic finding revealed multiple tumors at the pendulous urethra.

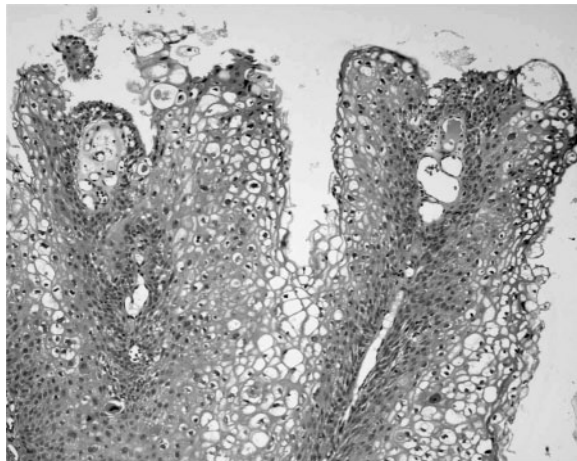


Fig. 2. Microscopic findings of the resected specimens (hematoxylin and eosin staining $\times 100$). Squamous epithelium showed koilocytosis.

めなかった。

治療経過:尿道悪性腫瘍を疑い、腰椎麻酔下 cold punch 法による尿道粘膜生検および経尿道的尿道腫瘍切除術を施行した。

病理組織学的所見 (Fig. 2):尿道腫瘍検体は乳頭状の増殖を示す重層扁平上皮および間質を認め、koilocytotic change を強く認めた。以上より condyloma acuminata と診断した。

術後経過:術後7日目に尿道バルーンを抜去、追加治療は行わず経過観察とした。術後3カ月後に亀頭部および尿道内における HPV の残存を PCR-Invader 法 (ビーエムエル社) にて確認した。前部尿道内擦過組織より低リスク型 HPV が検出されたが亀頭部は陰性であった。また術後1年後に再検査を施行したが、同様の結果であった。現在術後1年6カ月を経過しているが、尿道膀胱鏡上明らかな再発および尿道狭窄は認めていない。

考 察

尖圭コンジローマは HPV の主として 6, 11 型が感染して生じるウイルス性疣贅であり¹⁾、大部分が性行為やその類似行為で感染する。感染後、疣贅の出現までに 3 週～8 カ月 (平均 2.8 カ月) を要し、その期間に幅があるため感染機会を特定できないことも多い²⁾。好発部位は陰茎、外陰部、子宮頸部、肛門周囲

会陰部で、23% に陰茎外尿道口への波及を認める一方、尿道自体が侵されることは 5% 前後と比較的稀である^{3,4)}。男性尿道尖圭コンジローマの本邦報告例は、1971 年の岡部らの報告⁵⁾ 以来自験例を含め 67 例が報告されている。また 67 例中 64 例が外尿道口部や舟状窩を含めた外陰部に発生したものであり、より近位の尿道のみに限局して発症した例は自験例を含め 3 例のみであった^{6,7)}。この 3 例の臨床学的特徴を Table 1 に示す。外陰部病変を合併していた 64 例は年齢の中央値が 28 歳 (2～64 歳) と若年発生であるのに対し、この 3 例は発症年齢が高かった。また通常の尖圭コンジローマと比べ発症までの期間が長かった。外陰部病変を認めないため腫瘍に気が付かず、症状が出現するまで発見されないこと、また症状が非特異的であることがその原因と考えられた。また全例膀胱鏡で発見され、腫瘍を疑い経尿道的手術が施行され診断されている点が特徴的であった。

尖圭コンジローマの多くは性行為感染症の 1 つとして発症するが、性行為以外の発生原因も示唆されている。Sumino ら⁸⁾ は、高齢男性に発生した尿道尖圭コンジローマの 1 例を報告しており、健常男性の陰茎皮膚の 3.5～39.0% に HPV が存在し、この HPV が経尿道的手術を契機に尿道内へ散布されることで感染が成立したと推察している。また黒川ら⁹⁾ は尿道に限った報告ではないが、4 年間臥床状態にある 84 歳、男性に発症した尖圭コンジローマの 1 例を報告しており、尿道カテーテル挿入時、あるいはオムツ交換時の HPV 感染の可能性を示唆している。自験例は発症前 10 年以上にわたり性交渉がなく、性行為に起因する HPV 感染は否定的であろう。発症の 4 年前、人工骨頭置換術が施行された際に尿道カテーテルが挿入されており、Sumino らの報告同様逆行性操作により尿道内に HPV が押し込まれ感染が成立した可能性も推測されるが、亀頭部の HPV は陰性であり、真の発症原因および感染時期を推測することは不可能であった。

尿道尖圭コンジローマの治療法に関し一定の見解はないが、レーザー照射、5-フルオロウラシル (5-FU)¹⁰⁾、インターフェロンの局所注射¹¹⁾、経尿道的腫瘍切除、電気凝固、凍結療法などが報告されており、中でも 5-FU 注入の有用性を支持する報告例が多い。しかし尿道尖圭コンジローマ自体の発生率が少なく、その真の有用性は不明であり今後の検討が必要と

Table 1. Clinical characteristics of 3 cases of urethral condyloma acuminata without external genital lesions

報告者	報告年	患者年齢	発生部位	主訴	疑われる感染契機	発症までの期間	診断方法	治療法
山下ら	1991	77	後部尿道	排尿困難	陰茎部コンジローマの再発	約 2 年	逆行性尿路造影、膀胱鏡	経尿道的切除
岡本ら	1997	64	振子部尿道	肉眼的血尿	記載なし	記載なし	膀胱鏡	経尿道的切除
自験例	2012	76	振子部尿道	尿道出血	尿道バルーン挿入による逆行性感染?	約 4 年	膀胱鏡	経尿道的切除

考えられる.

尖圭コンジローマに対する HPV-DNA の型判定はルーチンでは行われていないと思われるが, Syrjänen SM らはコンジローマ症例91例中10例 (11%) に高リスク型 (16型もしくは18型) HPV-DNA を検出したと報告している¹²⁾. また陰茎癌¹³⁾および膀胱癌¹⁴⁾の発症と高リスク型 HPV との関連性も報告されている. このことから尿道尖圭コンジローマ症例においても HPV-DNA 検査を行い HPV のリスクタイプを確認することは, 追加治療の必要性や follow up 間隔などを考慮する上で意義があるのではないかと考える. 自験例は術後尿道内 HPV が陽性であるのにも関わらず1年半にわたり明らかな再発を認めていない. また HPV が健常男性の陰茎皮膚に比較的高率に存在していることを考慮すると HPV の存在が必ずしも再発を意味するものではないと思われる. 特に低リスク型 HPV が原因と確認されれば尿道膀胱鏡などは省略可能かもしれない. 一方, 高リスク型 HPV が検出された場合には, 膀胱鏡などを含めた厳重な follow up および追加治療も検討すべきであると考え.

また自験例のように外尿道口に病変が存在しない場合には, 外陰部からのウイルス持ち込みの可能性などの発生機序解明のために尿道の組織検体に加え, 陰囊, 陰茎など外陰部のスワブによる DNA 検査が有用であるかもしれない.

結 語

高齢男性の前部尿道に発生した尖圭コンジローマの1例について若干の文献的考察を加え報告した.

文 献

- 1) Arima Y, Winer RL, Feng Q, et al.: Development of genital warts after incident detection of human papillomavirus infection in young men. *J Infect Dis* **202**: 1181-1184, 2010
- 2) 日本性感染症学会: 性感染症診療・治療ガイドライン2011. 日性感染症会誌 **22**: 70-73, 2011
- 3) Debenedictis TJ, Marmar JL and Praiss DE: Intraurethral condylomas acuminata: management and review of the literature. *J Urol* **118**: 767-769, 1977
- 4) Grussendorf-Conen EI, Deutz FJ and Villiers EM: Detection of human papillomavirus-6 in primary carcinoma of the urethra in men. *Cancer* **60**: 1832-1835, 1987
- 5) 岡部達士郎, 吉田 修, 山下爵世, ほか: 興味ある尿道部腫瘍2例: (1) 血尿をきたした男子尿道尖圭コンジローマ: (2) 外陰部に突出せる巨大女子尿道部腫瘍. 日泌尿会誌 **62**: 911, 1971
- 6) 山下真寿男, 後藤章暢, 武中 篤, ほか: 後部尿道に発生した尿道尖圭コンジローマの1例. 泌尿紀要 **37**: 1559-1562, 1991
- 7) 岡本賢二郎, 岡 夏生, 松本 尚: 尿道尖圭コンジローマの1例. 回生病医誌 **6**: 55-57, 1997
- 8) Sumino Y, Mimata H and Nomura Y: Urethral condyloma acuminata following urethral instrumentation in an elderly man. *Int J Urol* **11**: 928-930, 2004
- 9) 黒川晃夫, 大津詩子, 森脇真一, ほか: 巨大尖圭コンジローマの1例. 臨泌 **60**: 621-623, 2006
- 10) 武田利和, 丸茂 健, 篠田和伸, ほか: 5-フルオロウラシル尿道内注入により治療した尿道尖圭コンジローマ. 臨泌 **57**: 921-923, 2003
- 11) 作間俊治, 森 良一, 熊澤淨一, ほか: 尖圭コンジローマに対する β 型インターフェロン局注療法を試み. 西日泌尿 **51**: 865-868, 1988
- 12) Syrjänen SM, von Krogh G and Syrjänen KJ: Detection of human papillomavirus DNA in anogenital condylomata in men using in situ DNA hybridisation applied to paraffin sections. *Genitourin Med* **63**: 32-39, 1987
- 13) 岩澤晶彦, 熊本悦明, 福島道夫, ほか: 尿路性器腫瘍における Human Papillomavirus (HPV) の検討. 日泌尿会誌 **81**: 1626-1632, 1990
- 14) Shigehara K, Sasagawa T, Kawaguchi S, et al.: Etiologic role of human papillomavirus infection in bladder carcinoma. *Cancer* **117**: 2067-2076, 2011
- 15) 岩澤晶彦: ヒトパピローマウイルス感染症 1 尖圭コンジローマから陰茎癌まで. 治療学 **31**: 37-40, 1997

(Received on June 15, 2012)

(Accepted on August 30, 2012)